

完璧な人間になるという事は幼い頃の私にとって憧れであり、目標でもありました。頭が良く、スポーツも得意で、常に高い志を持っている自分。そんなありきたりな理想像です。昔のように家柄や身分で判断される事なく、個人の能力や実績で職業を選ぶことができる社会。それが現在の社会です。なんて自由な世界なのか、一見そんな風に見えます。ですが自由という事は、自分で人生を決められる。逆に考えると自分で成功をつかみ取らなければならないのです。完璧な人間になるという事を理想として、ではなくノルマとして求められ、私は達成しなければならなくなったのです。今回のテーマである家族と自分の関係において、家族は口に出さずとも私に「そんな完璧な人間になってほしい」と願っているでしょう。それは全く間違っている事ではないのです。家族というグループのメンバーがより良い、充実した人生を送れるよう願うのは当たり前でしょう。ですが、ここで一つ問題点があります。

「私は全く完璧な人間ではないのです。」

桜が舞う入学式、大きなランドセルと希望を背負って小学校に入学した幼い私にとって、勉強、体育、音楽、全てが新しい体験でキラキラと輝く宝石を目の前にしたかのようなワクワクした気分でした。新しい教科書、教室の窓がピカピカと照らされていて、校庭一面に降りそそぐ太陽の光。まあ実際そんな事は無いのですが、そんな空想も交えながらも小学校という場所になじんでいきました。何も全てにおいて一番になれたという訳ではなく、むしろ少ないですが、自分が満足できる程のパフォーマンスは常にできていた様に記憶しています。そして、小学四年生の半ば、中学受験について両親と考え始め、塾に通う事にしたのです。自分にとっての転機はここだったと思います。他人と自分との違い、差について考えずにただ校庭を走り回っていた私に雨を降らせるような、そんな現実が襲ってきました。いつになっても、塾のクラス分けの際に上のクラスになれなかったのです。全国単位での成績順位も何千といった数値で、もはや笑ってごまかす事しかできませんでした。「放課後の本当は遊びたい時に塾に通って、夜遅くまで勉強しているのになぜ成績は上がらないんだろう。でもきっと天才が多いだけなんだ。」と自分に言い聞かせて。私は現実を見ずに雨が降っている事を無視して傘をささずにそのまま走り続けてるかのようでした。

その後なんとか恵泉に入学でき、ここまで通うことができました。でも、ただ何も考えず、なるがままに生きて、何もしていない、何もできていないのに時間は過ぎていく、中身の無い空っぽな人生の様に感じられました。私が幼い頃憧れていた完璧な人間とは程遠く、「自分で何なんだろうか。」という気持ちが日に日に増してきました。試験勉強のみならず、宿題でさえも苦勞する日もある状況で。昨日の自分から一歩も成長できていない、むしろ劣っていて、最終的には何もできなくなってしまうのではないかと。自分で目指している像とはあまりにもかけ離れすぎていて、どんどん自信を失っていきました。そんな時、ある人の言葉を聞きました。

「諦めてもいいんです。出来なくても良いんです。ダメでもいいんです。変でもいいんです。誰がなんと言ってもいいんです。それば自分だから。他の誰も自分を変えさせる事はできません。代わりに自分が自分自身に対する信頼をちゃんと持たなければならない。」

正直、初めてこの言葉を聞いた時、とても驚きました。なぜならこの言葉を語った人は、私にとって全て完璧で、何でもこなせる、私の理想像そのものの人だったからです。そんな人でも、たくさんの悩みや苦勞を抱えて生きてきたんだ。今まで、私は逃げたいと思った時もここで諦めたらここまで頑張ってきた成果を壊す事になる、それは決して許せない自分自身を消してきました。この言葉とは全く正反対の事をしてきたのです。でもものすごい努力をしてきた人にそう言われた時、自分の中でストーン、と何か重荷が軽くなったように感じました。また母も、私が色々と思い悩んで体調を崩した時、とても心配してくれました。「何よりもあなたが健康でいてくれる事が一番嬉しい」と。そんな時「ああ、私は一人じゃないんだな。」と強く感じたのです。今まで、自分がより良い人間になって、喜ばせたい、そんな気持ちを一番優先にしてきたけれど、家族にとって、私が自分自身を守る事が一番大切にしてほしいこと、優先なのかもしれない、と気づく事ができました。私の周りには、自慢できるくらい優しく頼れる友達ばかりです。決して完璧でなくても私は一人ではない。自分自身を守りながら生きていく。なぜなら、自分なしでは、人生は成り立たないのです。